

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家庭経営・経済

[P-090]

過疎化の進む地方都市に住む障害者のQOLを考える

—成人した障害者を対象とした金融教育講座を通して—

*安岡 知美¹、森田 美佐² (1. 高知大附属特支、2. 高知大)

◆ 家庭経営・経済

[P-092]

雑誌『Good Housekeeping US版』に表れる食生活観

過去20年間の誌面構成をもとに

*渡瀬 典子¹ (1. 東京学芸大)

◆ 家族

[P-094]

母親の語りにみる子育てにおける喜びと不安の変化（その2）

母親のQOLに着目して

*安東 英里佳¹、吉川 はる奈¹ (1. 埼玉大)

◆ 児童

[P-096]

台湾新北幼稚園の仮想現実地域活動カリキュラム

日本時代の地域資源発展の文脈から探る

*楊 清貴¹ (1. 台湾耕莘専校)

◆ 児童

[P-098]

小学校時代の生活はどのように捉えられているか

大学生によるふりかえり調査

*吉川 はる奈¹、安東 英里佳¹、入江 真愛¹ (1. 埼玉大学)

◆ 児童

[P-100]

地域に見守られて子育てをしていると感じる保護者の特徴

*會退 友美¹、伊藤 優²、池谷 真梨子³、淀川 裕美⁴、林 薫⁵、酒井 治子¹ (1. 東京家政学院大学、2. 広島大学、3. 和洋女子大学、4. 千葉大学、5. 白梅学園大学)

◆ 家政教育

[P-102]

父親のもつ子育て観と子供の生活技能習得に対する認識との関係に関する一研究

「生活重視型」父親の「語り」の質的分析から

*梶山 曜子¹、森 千晴²、宮川 駿³、鈴木 明子³ (1. 広島文化学園大、2. 岡山大、3. 広島大)

◆ 家政教育

[P-104]

家庭科教科書ならびにインターネットにおける基礎縫い動画の実態調査

*福井 典代¹、谷口 舞¹ (1. 鳴門教育大)

◆ 家政教育

[P-106]

小学校家庭科衣生活学習における実践的・体験的学習の検討

「わたしのふく絵本づくり」を事例として

*佐藤 ゆかり¹、石引 公美² (1. 上教大、2. 都留文大)

◆ 家政教育

[P-108]

マイクロ波を用いたレッドビーツ染色用教材

*松田 美帆¹、塚崎 舞²、藤本 明弘³、森田 みゆき² (1. 北海道拓北養護学校、2. 東京学芸大、3. 宮崎大)

◆ 家政教育

[P-110]

小学校家庭科における「地域」の学習の特徴

ー教科や校種の違いに着目してー

*田村 恭乃¹、倉持 清美¹ (1. 東京学芸大)

◆ 家政教育

[P-112]

女性誌に連載された「家庭科」講座

長期連載2講座の内容分析

*高橋 洋子¹ (1. 新潟大)

◆ 家政教育

[P-114]

小学校家庭科における家庭・地域に関する授業検討

非認知能力の育成に着目して

*志村 結美¹ (1. 山梨大学)

◆ 家政教育

[P-116]

家庭科におけるICTを活用した授業実践の事例分析

ICTを活用した授業の効果と課題

*永田 晴子¹、有友 愛子²、植村 徹³、川村 めぐみ⁴、津田 京子⁵、野村 知世⁶ (1. 大妻女子大、2. お茶の水女子大附属中、3. 筑波大附属駒場中高、4. 岩手大、5. 東京都立大泉桜高、6. 東京都立拝島高)

◆ 家政教育

[P-118]

家庭科衣生活領域における動画教材の学習効果

濱田 仁美¹、秋葉 京香¹、鹿嶋 紗英¹、本橋 菜穂¹、*野上 遊夏¹、川端 博子² (1. 東京家政大学、2. 元埼玉大学)

◆ 家政教育

[P-120]

消費者教育における対話型論証モデルを用いた大学生の論理的思考の検討

*三宅 元子¹、飯尾 健² (1. 名古屋女子大、2. 徳島大)

◆ 環境

[P-122]

企業と連携したSDGsイベント企画の将来性

ー大学生による古着交換会の取り組みを通してー

*周 雨¹、村上 かおり¹ (1. 広島大)

◆ 福祉

[P-124]

全国成人アンケート調査（2024）にみられるケアの自認と生活意識

*佐藤 真弓¹、齋藤 美重子¹ (1. 川村学園女子大学)

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20～12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家庭経営・経済

[P-090] 過疎化の進む地方都市に住む障害者のQOLを考える

—成人した障害者を対象とした金融教育講座を通して—

*安岡 知美¹、森田 美佐² (1. 高知大附属特支、2. 高知大)

キーワード：障害者、QOL向上、金融教育

目的 地方の人口減少が急速に進み過疎化が進行している中、障害者の生活や金銭・余暇についての実態を知り、豊かに生きていくために今後求められることを考察する。**方法**

(1) 高知県安芸市において就労支援施設を利用する10～60代の障害者(知的・身体・精神)を対象とした金銭を含む生活実態の調査を行う。(2) (1)の結果をもとに金融教育講座を行い、対象者の講座後の感想から考えの変容を探る。(3) 保護者にも「親亡きあとの心配なこと」について調査を行う。**結果** (1) 毎日が楽しくないと答えた人が2割弱いた。自分の給料や貯金についても全て保護者や支援者任せで本人は金額を知らないケースが多い。余暇で上位に挙げられた項目は昼寝、スマホ、買い物であり、余暇の選択肢・場所が少ない。(2) 講座では様々な生き方を提示し考えさせたことから、今後自分の給料額を知りたいと答えた人が大半。自分の通帳を見たい、自分で管理し、貯金をしていきたいと答えている。(3) 保護者は「親亡きあと」の子の自立した生活を心配しながらも具体的に行動に移していることがない家庭がある。**考察** 障害者は支援されるだけの存在となっていないか。障害があっても、自分で自分の豊かな人生をプロデュースできるように可能な限り支援し、料理や金銭等について本人が学ぶ機会、余暇を充実させるイベントを考えいく等、障害者のQOL向上のために、可能な施策を模索していく必要がある。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家庭経営・経済

[P-092] 雑誌『Good Housekeeping US版』に表れる食生活観 過去20年間の誌面構成をもとに

*渡瀬 典子¹ (1. 東京学芸大)

キーワード：食生活観、グッドハウスキーピング、雑誌

目的 創刊140周年を迎える『Good Housekeeping』は、アメリカの生活総合雑誌である。第76回大会では、同誌の日本版（1997年創刊～1999年以降休刊）に表れる「生活改善観」の特徴に焦点を当て、日本版が刊行された20世紀末の時代を映した生活へのアプローチを確認した。そこで本研究は、2000年代以降、生活環境・社会環境が変わりゆく中で、どのような生活価値観やライフスタイルの指向性をアメリカのメディアは提案してきたのかに注目し、『Good Housekeeping US版』における食生活観を中心に、誌面構成及び関連記事をもとに検討する。

方法 過去20年間に刊行された『Good Housekeeping US版』（2005年1月号～2024年11/12月号）の記事を分析資料とする。

結果 『Good Housekeeping US版』の誌面は食生活（調理）、住生活（インテリア）、美容、健康、旅行、消費生活（商品テストを含む）、人間関係、保育等の記事で構成されており、食生活（調理）に関する内容を中心とした構成がとられている。20年間で総ページ数が約半分に減り、インタビュー記事などの人に焦点を当てた内容が減り、実用的かつコンパクトな記事内容に変化している。また、調理記事では「健康的（healthy）」という視点は20年前も現在も共通しているが、「簡単」「〇分調理」などの時短を謳う記事が、近年では目立つ傾向にある。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家族

[P-094] 母親の語りにみる子育てにおける喜びと不安の変化（その2）

母親のQOLに着目して

*安東 英里佳¹、吉川 はる奈¹ (1. 埼玉大)

キーワード：子育て、QOL、母親、縦断研究

＜問題と目的＞核家族化や地域関係の希薄化など、孤立した子育てに繋がりやすい社会的背景の中で、よりきめ細やかな子育て支援が必要となる一方、コロナ禍以降広がりを見せる在宅ワークが、子育て家庭にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする調査研究は少ない。変化の激しい現代社会における家庭生活に焦点を当て、幸福感やwell-beingの視点から、「生活の質（Quality of life：QOL）」を含めた子育て支援について検討していく。

＜対象と方法＞乳幼児を子育て中の母親を対象に子育ておよびQOLに関する質問紙調査を行った。さらに子育てに関する不安や喜び、生活等について、半構造化面接によるインタビュー調査を行った。子育ての時間経過とQOL評価の変容を明らかにするため、児が10ヶ月時、1歳5ヶ月時と継続調査を行った。

＜結果＞新生児期には母親の「睡眠不足」が大きな悩みとなっていた。その後児の生活リズムが安定するまで繰り返す「夜泣き」の時期には、友人との情報交換や運動量の確保などの工夫で乗り越えていた。父親が在宅ワークであることは子どもと過ごす時間の増加に繋がった。そのことは、母親が父親について子どもを安心して預けることができる存在として受け止めることに繋がり、ストレスの軽減に向けた行動を起こすことを後押ししていた。育休取得からの復職は大きな不安要因であり、個々の不安に寄り添った柔軟な働き方が選択できることが求められる。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 児童

[P-096] 台湾新北幼稚園の仮想現実地域活動カリキュラム 日本時代の地域資源発展の文脈から探る

*楊 清貴¹ (1. 台湾耕莘専校)

キーワード：VRコース、地域活動、日本統治時代

Purpose

From 1895 to 1945, Taiwan was under Japanese rule. During this period, Japan implemented numerous constructions and systems. Taiwan's first kindergarten was established in 1897 in Tainan City and gradually developed over time. Today, when kindergartens in Taiwan conduct community activity programs, many of the institutions or facilities they visit were built during the Japanese colonial period. Helping young children learn about the origins of these community institutions or facilities can enhance their understanding of historical context and further strengthen their sense of community identity.

Method

This study focuses on a kindergarten in New Taipei City, Taiwan, selecting several community institutions or facilities that children frequently encounter. Using VR technology, virtual environments were created, allowing children to experience the community setting in the classroom through specially designed goggles. The research examines children's observations and feelings toward these community institutions or facilities. To provide historical context, old photographs of these institutions or facilities from the Japanese colonial period were presented for comparison, enabling the children to perceive the changes over time.

Results

Most children found the VR experience of community institutions or facilities to be novel and fascinating, allowing them to observe many details and deepen their impression of these places. Additionally, by comparing old photographs from the Japanese colonial period, they were able to identify and analyze details, expressing admiration and appreciation for the establishment of these institutions or facilities during that era.

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20～12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 児童

[P-098] 小学校時代の生活はどのように捉えられているか 大学生によるふりかえり調査

*吉川 はる奈¹、安東 英里佳¹、入江 真愛¹ (1. 埼玉大学)

キーワード：学童期、生活、振りかえり調査

【目的】学童期の生活はどのように捉えられているのかをふり返り調査で明らかにする。大学生を対象とした小学校時代の生活記録の調査は吉川（2007）による先行研究がある。子どもを取り巻く状況は大きく変化しており、20年前の学生と現代の学生がそれぞれ小学校時代をどのように捉えているのか共通点や相違点を明らかにしたい。あらためて学校をはじめ、学童期の生活が子どもの成長にとってより良い環境となる上での示唆をえたい。

【方法】（1）対象：203名（2）方法：先行研究や予備調査をもとに作成した小学校時代の生活や思い出について回答を求め（自由記述を含む）、得られた回答について先行研究を参考に学校記述（学校生活に関するもの）、人記述（人との関係に関するもの）、学校外記述（学校以外の活動に関するもの）、家庭記述（家庭生活に関するもの）に分類して比較、検討した。

【結果】小学校時代に「嬉しかったこと・楽しかったこと」としては学校生活に関するもの45%、「辛かったこと・悲しかったこと」としては人間関係が55%と最も印象に残っていると回答し、20年前と同様であった。一方で、20年前と比較して、習い事による影響が増大しており、学校生活の影響力の低下にもつながっていると考えられる。特に、小学校時代のうち高学年において学校生活の印象低下が浮き彫りとなった。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 児童

[P-100] 地域に見守られて子育てをしていると感じる保護者の特徴

*會退 友美¹、伊藤 優²、池谷 真梨子³、淀川 裕美⁴、林 薫⁵、酒井 治子¹ (1. 東京家政学院大学、2. 広島大学、3. 和洋女子大学、4. 千葉大学、5. 白梅学園大学)

キーワード：地域、子育て、保護者意識

〔目的〕本研究は、就学前施設に通う保護者が地域に見守られて子育てをしていると感じる人の特徴を検討した。〔方法〕調査方法は、伊藤らの報告と同様である。解析は、“地域の人に見守られて子育てができていると思う”という問いに対し、全く・あまりあてはまらない103人(34.4%)、まあ・よくあてはまる197人(53.7%)の高群低群にわけ、他項目とクロス集計を作成してカイ二乗検定を行った。〔結果〕高群の方が低群に比べて(各 $p<0.01$)、“子育ては親だけでなく周囲の人と共にするものだ”と回答する者が多く、子育てを前向きにとらえている者が多かった。家族以外の人と関わりが増えることを喜びと感じる人や地域の人との交流が子どもの成長により影響を与えると思う人が多かった。子どもが園周辺で開催される地域のお祭りやイベントに参加すると回答する人が多く、保護者が園のある地域の人と挨拶をするよくしていた。地域の郷土料理や年中行事など食文化を大切に考える保護者が多く、保護者が地域の行事等に参加すること、地域の人と活動をするに対しても前向きにとらえている者が多かった。一方、園周辺地域の居住年数、保護者の性別に関連はみられなかった。〔まとめ〕地域に見守られて子育てをしていると感じる人は、園周辺で子どもが地域と交流をしており、保護者は食文化継承を大切に考え、地域との交流に対して前向きであり、子育てに前向きな気持ちを有していた。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

2025年6月1日(日) 11:20～12:00 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家政教育

[P-102] 父親のもつ子育て観と子供の生活技能習得に対する認識との関係に関する一研究

「生活重視型」父親の「語り」の質的分析から

*梶山 曜子¹、森 千晴²、宮川 駿³、鈴木 明子³ (1. 広島文化学園大、2. 岡山大、3. 広島大)

キーワード：父親、子育て観、子供の生活技能、質的分析

【目的】我々はこれまでに、母親の子育て観や父親の生活態度及び父母夫婦の関係性が、子供の生活技能習得に影響を及ぼすことを明らかにした(梶山ら2015, 2018)。前報では、父親の子育て観と子供の生活技能習得に関する認識の関係を探るため、先行研究(梶山ら2015)を基に分類した子育て観の内「学業優先型」と「両方位型」の父親による子供の生活技能習得に関する認識を分析し、生活技能を学力として捉えているかどうかの違いを見出した。本報では、「生活重視型」の父親がもつ子供の生活技能習得観に関する質的分析を行うことを目的とした。

【方法】2021年9月、小学生の子供をもつ父親2名を対象に半構造化面接を行い、逐語録を作成した後SCAT(大谷2011)による質的分析を行った。

【結果】「生活重視型」の子育て観をもつ父親2名(F・G)は、子供が生活技能を習得することに高い関心を抱いていることが明らかとなった。父Fは、受験重視の学力観と結果重視の価値観をもっており、子供の生活技能習得については、小学校の家庭科教育による基礎・基本の定着を期待する面が認められた。性別役割分業意識の弱い家庭環境で育った父Gは、主な子供の生活技能習得の場は家庭であると捉え、学校教育に対してはその動機付けの役割を期待していた。また、子供の生活技能習得における父親の役割として、家庭内で日常的に父親が家事をする姿をみせることが大切であるとの認識を示した。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家政教育

[P-104] 家庭科教科書ならびにインターネットにおける基礎縫い動画の実態調査

*福井 典代¹、谷口 舞¹ (1. 鳴門教育大)

キーワード：家庭科教科書、インターネット、基礎縫い動画、実態調査

目的 小・中学校の家庭科教科書ではQRマークが掲載されており、学習内容を補足する資料や動画を参照することができる。これらの資料や動画を活用することによって児童・生徒の学びが深まる。本研究では小・中学校の家庭科教科書とインターネットで公開されている基礎縫い動画を調査して実態を把握することを目的とした。

方法 (1)小・中学校家庭科の学習指導要領解説における基礎縫いに関する取扱いについて調査した。(2)小学校家庭科教科書2冊と中学校家庭分野教科書3冊の中の基礎縫いに関する動画(QRコード)の種類と内容について調査した。(3)GoogleとYouTubeの中の基礎縫い動画の掲載内容に関する調査を行った。検索は2024年9月に実施した。

結果 (1)小・中学校の学習指導要領解説では、手縫いとしてボタン付け、玉結び、玉どめ、なみ縫い、返し縫い、かがり縫い、まつり縫い、スナップ付けなどについて記述されていた。(2)基礎縫いの基本的な学習内容は、小・中学校の教科書中にすべて動画教材として扱われていたが、動画時間や繰り返し機能の有無については教科書会社によって違いがみられた。(3)インターネット中の基礎縫い動画教材を検索した結果、大学以外のデザイン事務所により作成された動画の視聴回数が最も多く再生されていた。教科書に記載されている内容と異なる表現がみられたが、画質がよく教材として十分活用できることがわかった。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家政教育

[P-106] 小学校家庭科衣生活学習における実践的・体験的学習の検討 「わたしのふく絵本づくり」を事例として

*佐藤 ゆかり¹、石引 公美² (1. 上教大、2. 都留文大)

キーワード：家庭科、衣生活学習、小学校、実践的・体験的学習、拡張的学習、活動理論

目的 エンゲストロームの「拡張的学習」の理論を整理し導き出された家庭科の実践的・体験的学習が目指したい「6つの示唆」が報告されている。それは(1)子どもが対象に向かう目標や動機、使うことができる道具や集団を考える(2)衣食住など個々の人間生活を考える際にも、生活の全体性を考える(3)学習の対象を子どもの生活の中の違和感として捉え直し、動機とする(4)学習の中で発生する矛盾を問いとして、その解決を模索する活動からうみだされる(5)科学と芸術の成果を道具として学習活動を行い、その成果を新しい生産的实践にする(6)対象が使用価値と交換価値の二重の性格をもつからこそ学習する意味がある、である。しかし、どのような家庭科授業がそれにあたるかの検討はなされていない。そこで衣生活学習を事例に「6つの示唆」を含み得ているかを評価・検討した。

方法 教材「わたしのふく絵本づくり」による授業（2024年7月、J小学校5年生10人を対象）と評価（2025年1月、担任を対象としたヒアリング調査）をおこなった。

結果 自分の衣服に着目し、そこを起点として自分の衣生活全体を想像することにより、縫うことが児童の生活で必然性をもつ課題として位置付けられた等を理由とし、授業は児童にとって楽しい学習であったと評価された。授業は「6つの示唆」を含むと解釈できるものであったが、(5)(6)の示唆が含まれる授業と担任が認識することは難しかった。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

2025年6月1日(日) 11:20～12:00 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家政教育

[P-108] マイクロ波を用いたレッドビーツ染色用教材

*松田 美帆¹、塚崎 舞²、藤本 明弘³、森田 みゆき² (1. 北海道拓北養護学校、2. 東京学芸大、3. 宮崎大)

キーワード：教材、染色、繊維、レッドビーツ、マイクロ波（電子レンジ）

目的 家庭科における染色教材は、従来法では抽出、染色に時間がかかり、近年の家庭科の授業時間数内で実施するには困難を伴っている。我々は、これまで電子レンジを使用した染色の検討をおこなっており、本研究ではレッドビーツ（赤ビート、テーブルビート）を用い、織や繊維の性質も学習できる教材の検討を行った。

方法 染色する繊維に羊毛、木綿、アクリル糸を用い、自作の簡易織り機¹⁾で織物を製作した。レッドビーツの色素の抽出は、電子レンジを使用してクエン酸溶液中で500W照射時間2分で行った。染色は500W照射時間30秒で染色し、その後すすぎ、風乾した。染色布を色差計で色差を測定し、色彩安定性を検討した。

結果 マイクロ波染色では、アクリル、木綿、羊毛の順に濃色となり、羊毛は1分以内の短時間で、レッドビーツの色素で染色できることがわかった。複数の繊維を用いた織物を染色することで、「織物の構造を知る」、「繊維の染色性について目視で理解しやすい」、「マイクロ波染色は短時間で行える」ことから、学校教材に適していると考えられる。

1) 松田美帆、森田みゆき、衣生活教育における簡易織り機の開発—特別支援を要する児童・生徒への衣生活教育に視点を当てて—、東京学芸大学紀要総合教育科学系、72、373-380 (2021)

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20～12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家政教育

[P-110] 小学校家庭科における「地域」の学習の特徴 ー教科や校種の違いに着目してー

*田村 恭乃¹、倉持 清美¹ (1. 東京学芸大)

キーワード：家庭科、地域、小学校、学習指導要領、教科書

問題と目的 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 家庭編では、低学年児童などの地域との関わりについて、社会の変化を受けた改訂として示されるようになった。しかし、具体的な「望ましい関わり」について明記されていない。そこで、「地域」を扱う他の教科と家庭科での学びを比較し、「地域」の扱われ方を明らかにするとともに、他校種での「異なる世代との関わり」の記述から、小学校家庭科で目指されるべき「望ましい関わり方」を考察することを目的とする。

方法 小学校学習指導要領解説（平成29年告示）及び教科書（令和5年検定済）から、生活科（14冊）、社会科（6冊）、家庭科（2冊）における「地域」に関する記述、中学校・高等学校家庭科と小学校の学習指導要領における「異なる世代との関わり」の記述を、テキストマイニングを使用して、分析した。

結果と考察 他教科との比較において、「地域」の扱われ方に違いが見られた。生活科では、「地域」として人と場所の両方、社会科では場所、家庭科では人に関連しているという特徴があることが分かった。そのため、家庭科の授業では、他の教科で学んだ「地域」に関する知識や技能を生かすことのできる授業が望ましいといえる。さらに、他校種との比較から、家庭科教育の基盤をつくる小学校段階では、地域にいる人に焦点を置いた授業を行うことで、自分と他者の発達や生活の違いを理解し、共感する力の育成が期待されると考えられる。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20～12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家政教育

[P-112] 女性誌に連載された「家庭科」講座 長期連載2講座の内容分析

*高橋 洋子¹ (1. 新潟大)

キーワード：Web OYA-bunko、女性誌、家庭科、連載講座

目的 女性誌に連載された「家庭科」講座として7講座を選出し、2020年の日本家政学会大会でその概容を報告した。本報では、上記7講座のうち、比較的長期にわたって連載された講座の内容分析を通じて、学校教育以外の場における「家庭科」の概念を考察するとともに、女性の素養として推奨された生活技量の変容についても考察する。

方法 (1)雑誌記事データベースWeb OYA-bunkoを利用して、タイトルに「家庭科」という語を含む連載を選出した。(2)選出された講座のうち、連載回数が100回以上の講座を長期連載講座として、本報における分析対象とした。

結果 (1)分析対象として、2018～2021年に週刊J誌に107回連載された「大人の家庭科」および1988～1993年に月2回刊C誌に100回連載された「C家庭科」の2講座を選出した。(2)講座の内容は、2講座とも、学校教育の家庭科で履修する内容のほか、美容・園芸・冠婚葬祭のマナーなど、広範囲にわたるものであった。(3)「大人の家庭科」は日常生活で実践されている家事に関する基本的な事項について専門家が丁寧に解説する形態、「C家庭科」では業者に任せがちな専門的な技量についても家庭で挑戦することを提案するなど、講座ごとに特色がみられた。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家政教育

[P-114] 小学校家庭科における家庭・地域に関する授業検討 非認知能力の育成に着目して

*志村 結美¹ (1. 山梨大学)

キーワード：非認知能力、家庭・地域、小学校家庭科

【目的】近年、地域社会の教育力の低下等により、学校教育には「社会に開かれた教育課程」としての役割が期待されている。小学校の家庭科においても、学習指導要領（2017）にて幼児又は低学年の児童や高齢者など異なる世代の人々との関わりについて扱うよう明記され、家庭、地域、社会の空間軸の広がりやさらに重視されている。一方で、非認知能力の育成も喫緊の課題と言われている。そこで、本研究では、大学生、家庭科を担当する小学校教員対象調査より、家庭・地域に関する意識の実態や授業実践等を明らかにし、小学校家庭科における非認知能力の育成に着目した家庭・地域に関する授業検討を行うこととした。

【方法】①大学生対象アンケート調査：2022年10月～11月実施、Y大学1年生456名対象、②小学校教員対象アンケート・インタビュー調査：2022年12月実施、5名対象

【結果】大学生対象調査では、非認知能力である自尊感情や時間的展望等が低い傾向にあることが明らかとなった。また、多くが地域社会に対して自ら積極的に関わろうとしているものの、実際に行動に移している人は少なく、意識と行動に有意な違いが認められた。小学校教員調査からは、実践的・体験的な教科である家庭科の特徴を活かし、学校での学びを家庭生活の中で実践し、自分や家族の生活をより良く工夫しようとする力を身に付けて欲しいと考え、実践している姿が明らかとなった。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20～12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家政教育

[P-116] 家庭科におけるICTを活用した授業実践の事例分析

ICTを活用した授業の効果と課題

*永田 晴子¹、有友 愛子²、植村 徹³、川村 めぐみ⁴、津田 京子⁵、野村 知世⁶ (1. 大妻女子大、2. お茶の水女子大附属中、3. 筑波大附属駒場中高、4. 岩手大、5. 東京都立大泉桜高、6. 東京都立拝島高)

キーワード：家庭科、ICTの活用、効果と課題

目的 本研究は、小学校から高等学校までの家庭科の授業におけるICTを活用した授業実践の事例分析を通して、授業の効果と課題を把握し、家庭科教育への示唆を得ることを目的とする。

方法 2023年10月～2024年1月に、全国家庭科教育協会の会員および研究大会に参加した家庭科教員を対象として、Googleフォームを用いた自記式質問紙調査を行った。調査項目は、①実践授業の事例提供および②ICTを活用した授業の効果と課題である。

結果 分析対象とした小・中・高等学校の授業実践事例、計40事例について、ICTを活用した授業を分野別に整理を行った結果、40事例中26事例が学習指導要領の「B衣食住の生活」に係る事例であった。授業形態は、講義での活用が13事例、実習での活用が25事例、その他2事例であった。ICTを活用した授業の効果や課題に関する自由記述では、「授業の効率化」との回答が最も多く回答者の30%におよび、「板書時間を短縮でき実習時間や個別の指導時間を増やせる」との指摘があった。次いで「個別学習の支援・促進」が挙げられ、生徒が個々のタイミングで教材を視聴し課題解決が図りやすくなった等の指摘が挙げられた。一方、活用課題については、「機器などの技術的なトラブル」が最も多く、トラブル発生時の迅速な対応に関する困難を挙げた。また、授業実施上のリスクとして、授業と無関係な動画視聴など、授業規律の保持に関する困難さも挙げられた。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家政教育

[P-118] 家庭科衣生活領域における動画教材の学習効果

濱田 仁美¹、秋葉 京香¹、鹿嶋 紗英¹、本橋 菜穂¹、*野上 遊夏¹、川端 博子² (1. 東京家政大学、2. 元埼玉大学)

キーワード：衣生活領域、家庭科、教材、動画学習

目的 近年学校教育において、ICT活用による教育が急速に普及している。本研究では、家庭科衣生活領域における動画教材の使用による効果を調査し、動画教材による学習効果を検証することを目的とする。

方法 家庭科衣生活領域の「衣服素材の吸水性」、「衣服の強度と伸張特性」という2つの動画教材を作成し、その学習効果を検証した。東京家政大学の教職課程を履修している3年生55名（服飾美術学科29名、栄養学科26名）を対象に、動画学習グループとプリントによる資料学習グループに分けて、学習前後の事前事後テスト、アンケートを実施した。

結果 事前事後テストの選択問題の平均点を比較すると、資料学習グループの方が動画学習グループよりも平均点の上昇率が高い結果となった。単語などの要点は資料学習で定着率が高かったと言える。しかし、記述問題では動画学習グループの方が平均点は高かった。全体的内容を理解していないと正答できない記述問題では、動画学習の方が効果的であったと考えられる。また、被服系が専門の服飾美術学科の学生の方が、動画学習グループ、資料学習グループともに平均点上昇率が大幅に高かった。題材に興味を持って集中して学習したと考えられる。アンケートからは、両学科の学生共に、動画教材での学習の方が「興味を持てた」、「理解できた」と回答した学生が多く、「授業に動画教材を取り入れた方が良い」という回答も多かった。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 家政教育

[P-120] 消費者教育における対話型論証モデルを用いた大学生の論理的思考の検討

*三宅 元子¹、飯尾 健² (1. 名古屋女子大、2. 徳島大)

キーワード：消費者教育、対話型論証モデル、論理的思考

目的 現在、消費者教育では、自立した消費者となるためには知識と批判的思考の両者を身に付けることが求められている。そこで、本研究では批判的思考の中でも特に「対話型論証モデル」を用いた論理的思考に着目し、大学の授業における実践から、学生は論理的思考が求められる際にどのように思考しているかを検討する。

方法 本研究の同意が得られた学生86名(3、4年生)を対象に、2023年度前期開講の専門科目「S」で「対話型論証モデル」のワークシートを用いて実施し、学生が記入した内容をルーブリックで評価する。また、授業終了時に実施した自由記述での振り返りについてテキストマイニングによる分析を行う。

結果 ルーブリックの評価結果をもとに学生を高群と低群に分け、観点ごとにレベルの分布を比較した。高群の学生は、賛成と反対の立場をキーワードをもとにしっかりと示し、反論を考え最後に結論を出すという対話型論証モデルの形に沿いながら論理的思考が行われていた。一方低群は、最初の賛成・反対の立場を検討する時点で躓きが見られ、そのための確に「反論」や「結論」を示すに至らなかった。また、振り返りのテキストマイニングの結果、高群の学生は自分なりの結論を出すことを強く意識していたが、低群の学生は賛成・反対の立場の論理を検討することに注目しており、高群と低群の学生では対話型論証モデルで注目する点が異なっていることが明らかとなった。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 環境

[P-122] 企業と連携したSDGsイベント企画の将来性

-大学生による古着交換会の取り組みを通して-

*周 雨¹、村上 かおり¹ (1. 広島大)

キーワード：衣類、リユース、古着、持続可能性

目的

衣類の大量生産・廃棄が環境問題となるなか、衣類のリユースの促進が求められている。そこで本研究では、家庭科教員養成課程に所属する学生が、企業と連携したSDGsイベントに参画し、大学生として独自の企画に取り組んだ。その取り組みを通して、リユース活動の可能性と将来性について考察することを目的とする。

方法

2024年10月20日に、アウトドアブランド企業と連携したSDGsイベントを大学内で開催、その企画の一つとして「古着交換会」を実施した。開催前には、大学内5か所に衣類回収ボックスを設置し、回収した衣類を分類、数量を記録した。イベント当日は、事前回収品と当日持参品を展示し、参加者が自由に交換できるブースを設置した。イベントにおける衣類の事前回収と交換の実態を集計分析し、参加者の行動を観察した。

結果

事前に回収した衣類はトップスが最多で、次いでボトムス、アクセサリー、アウターの順であった。回収ボックスの設置場所によって回収数に差がみられた。当日最も多く交換されたのは、アウターで、その交換率は69%であった。次に高いのはアクセサリー類で65%であった。また、男性のトップスの交換率も54%と高く、着回しのしやすさやサイズの適応範囲の広さが起因していると考えられる。一方、スカートの交換率は極めて低く、着用機会が限定されること要因と推測された。また、交換会参加者の半数以上が外国人であり、積極的に参加する姿が観察された。

ポスター発表 | ポスター発表：家庭経営・経済／家族／児童／家政教育／環境／福祉

📅 2025年6月1日(日) 11:20 ~ 12:00 📍 3G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 福祉

[P-124] 全国成人アンケート調査（2024）にみられるケアの自認と生活意識

*佐藤 真弓¹、齋藤 美重子¹ (1. 川村学園女子大学)

キーワード：ケアに対する自認、生活意識、全国成人アンケート調査

目的：一般にケアに関わる課題は介護、育児など個別に議論されることが多いが、相手を心配し、気遣うといったケアは全ての人々の日常生活に存在する。本研究では、相手への気遣いを含むケアを受けているか、ケアしているかについての認識と生活との関連を数量的に検討した。

方法：2024年11月、リサーチ専門機関に依頼し、18歳以上3000人を対象にwebアンケート調査を実施した。「家族や身近な人の誰かから世話されたり、心配や気遣いなどのケアを受けているか」、「家族や身近な人の誰かを世話したり、心配や気遣いなどのケアをしているか」の自身の認識と、孤立、孤独意識、生活満足意識等との関連を検討した。調査は川村学園女子大学倫理委員会の承認を得て行った。

結果：ケアしているか、ケアされているかの有無をクロスさせ4分類すると、「ケアし、ケアされている」25.8%、「ケアし、ケアされてない」29.4%、「ケアしていない、ケアされている」3.1%となった。最も多かったのは「ケアしていない、ケアされていない」41.7%であるが、自分は人との付き合いがないものの、周囲から取り残されてはいないとし、孤独感を持っていないことから、他者とのケア関係を積極的に拒否している可能性が示された。またさらに、「ケアしている」55.2%は、「ケアしていない」44.8%よりも、人との付き合い、心身の健康、生活満足感、経済的ゆとりに対する意識が有意に高かった。